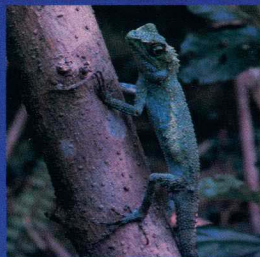


# 原色 | 両生・爬虫類

千石 正一 編



家の光協会

# 原色|両生・爬虫類



千石 正一編

家の光協会

## 原色／両生・爬虫類

---

昭和54年7月3日

第1版発行

編 者            千 石 正 一  
                    (日本野生生物研究センター)

発 行 者            来 馬 希 木

発 行 所            社団法人 家の光協会  
東京都新宿区市谷船河原町11 (〒162)  
電話／東京 260-3151(大代表) 振替／東京 5-4724

印刷／大日本印刷KK            製本／寿製本KK

---

落丁本や乱丁本はおとりかえします

© SHYOICHI SENGOKU

1979 Printed in Japan

0077-53503-0301

## まえがき

爬虫・両生類は、少なくともその野外で出合う機会の多さに比べれば、なじみの薄い動物達であろう。また、最近になって発見された種類や知見もあり、一般には知られていないことが多い。日本産の種を写真と共に紹介するような本でもあれば便利だろう、という声はかねてからあった。この本の企画があがったとき、思い切ってお引き受けすることにしたのは、そういう背景があったからである。

そこで、内容に関しては、読者の方々の必要性になるべくでも即するように努めた。手配の時間などが充分でなく、残念ながら全種の収録はできなかつたが、既知のほとんどの種をカラー写真で紹介することができた。その大半は生態写真である。区別点を記し、成体・幼体で色や形が異なるものなどでもできるだけ紹介し、フィールドガイド的な性格にしようとした。その一環として、生態に関する記述をなるべく多く入れるようにした。知見自体が少なく、また、地域などによっても異なるのももちろんなので、一つの目安と考えると読んでいただきたい。大きさなどの数値に関してもこの点は同様である。

この方針にそって本書を著していくのは、浅学の私一人の身には最初から全く無理であったが、幸いにして、実に多くの方々のご協力がいただけ、刊行にこぎつけることができた。ここに記し、心より感謝申し上げる次第です。

実際のとりまとめにあたっては、東京大学の大河内勇氏に全面的な尽力をいただいた。

両生類に関しては、ほとんどが氏の功績によるものである。京都大学の松井正文助手には、両生類全般の解説の執筆と、両生類全体の原稿内容の検討とをしていた。上野動物園水族館の原幸治・山本洋輔の両氏には、全文にわたって校閲していただき、かすかすの助言を与えられた。常に激励いただいたこれらの方々に厚くお礼を申し上げます。

大平養護学校の当山昌直氏、沖縄県公害衛生研究所の勝連盛輝氏からは、琉球列島全般の種について、有益な助言と知見とをいただいた。広島大学の宇都宮妙子女史は両生類の項に関し、積極的に努力してくださいました。これらの方々には、合わせて深い感謝の意を表させていただきます。

広島大学名誉教授の川村智二郎氏にはトウキョウダルマガエルに関してご教示をいただいた。岡山大学の前教授、守屋勝太氏からはトノサマガエル種群について知見と助言をいただいた。日本両棲爬虫類研究所の松井孝爾氏は、ヤクヤモリに関してご教示をしてくださいました。熊本医療短大の沢田昭三教授にはイモリの性行動に関して知見をいただいた。干川裕氏と日本蛇族学術研究所の高橋寛氏からは、ウミヘビ類について多大な情報を寄せられた。鈴ヶ峰短大の森脇徳三教授はヌマガエルの産卵をご示唆くださいました。より良い本にするためご尽力くださったこれらの方々には、特別の謝意を表させていただきます。

大河内勇・松井正文・宇都宮妙子・当山昌直・田中聡・国領康弘・竹中踐・疋田努・長谷川雅美・武藤暁生・松本健二・森口一の各氏は、それぞれ専門の分野につき、執筆の労をとられた。本書の重大な部分を担当いただいた皆様にご心からお礼申し上げます。

青山潤三・宇都宮妙子・大河内勇・勝連盛輝・倉本満・国領康弘・小林敏男・リチャード・ゴリス・佐藤和彦・佐藤隆・鈴木信義・高橋寛・竹中踐・千木良芳範・当山昌直・橋本正雄・原幸治・疋田努・松井正文・松本健二・水野重樹・武藤曉生・森口一・安間繁樹・吉田朝啓・吉村悦郎の各氏は、本書の骨格をなす、貴重な写真を快く提供して下さった。残念ながら収録しきれなかったが、この他にも数多くの写真を貸与いただいている杵淵謙二郎氏をはじめ、それらの方にも、合わせて深謝させていただきます。

青木良輔氏をはじめとする、爬虫両生類情報交換会の諸氏には、普段からの有益な助言をいただいている。東京大学の金子与止男氏は両生類の項の文章を校閲して下さった。解説部分の図は塚越香氏に描いていただいた。家の光協会の鈴木俊彦・若槻武行両氏には最後までいろいろとお世話になった。小町修三氏はレイアウトや校正などで無理な注文に付き合っていたいただいた。これらの方々にも厚く感謝いたします。

引用文献を記すことはできなかったが、先学諸兄の業績なしに執筆は不可能であった。この他にも、名前をあげることができないほど多くの方々には有形無形のご支援をいただいた。以上の方々のご協力を一人でも欠いていれば、本書の刊行は望めなかった。最後に、ご多忙中にもかかわらず、お付き合いいただいた全ての皆様に、心から謝意を捧げます。

一九七九年六月

千石正一

(日本野生物研究センター)

## 目次

ヌマガメ科	5	ウミヘビ科	80
ウミガメ科	12	マムシ科	85
スッポン科	14	サンショウウオ科	93
イグアナ科	15	オオサンショウウオ科	116
アガマ科	16	イモリ科	118
ヤモリ科	18	アマガエル科	122
カナヘビ科	28	ヒキガエル科	124
トカゲ科	33	ヒメアマガエル科	132
メクラヘビ科	48	アカガエル科	134
ナミヘビ科	49	アオガエル科	165
コブラ科	78	解説 両生爬虫類を知るために	177



## イシガメ

ヌマガメ科

学名 *Mauremys japonica*

分布 本州・四国・九州、佐渡・隠岐  
・見島・壹岐・対馬・五島列島などの  
島々。

背甲は、中央に不連続な一本のうね  
があり、背甲の後縁がギザギザしてい  
る。背甲は褐色で、はつきりしない斑  
紋がある。腹甲は一樣に黒色。甲長一  
三〜一八cm。

淡水性で、池沼・溪流などにすむ。  
三〜四月に冬眠から覚め、一〇月頃ま  
で活動するらしい。水中で泥や落葉に  
潜って冬眠する。

雌は穴を掘って産卵し、その上に後肢  
で土をかぶせて跡を判らなくして立去  
る。卵は楕円体状で、一腹の数は四〜  
一〇個。六〜七月に産卵され、八〜一  
〇月にフ化する。フ化したての幼体は  
甲長三五mm程で、成体に比べると甲が  
ずっと丸く、尾が長い。なお、ゼニガ  
メというのはイシガメの子をさすが、  
近年ゼニガメと称して売られているの  
はクサガメの幼体であることが多い。





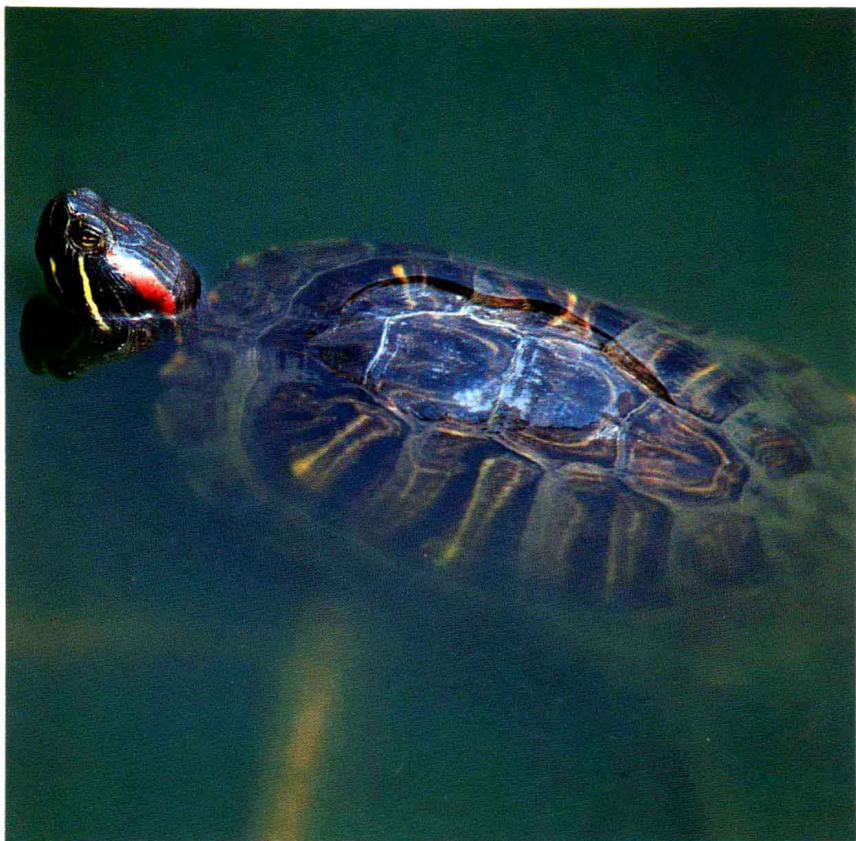
ミナミイシガメ ヌマガメ科

学名 *Mauremys mutica*

分布 本州(京都北部周辺)、トカラ列島の悪石島、八重山群島の石垣島・西表島・与那国島。日本での分布は不連続で、人為の影響を受けた可能性もある。国外では台湾・中国中南部・海南島・インドシナ北部。

甲はあまり高くない。全体に平滑な感じがする。背甲には三本のうねがあるが、特に左右の二本は不明瞭で、老熟すると消えてしまう。背甲の縁はほぼ滑らか。腹甲は色が淡く、黒褐色の斑紋がある。この暗斑は、幼体では中央に集まっているが、成長につれて外側に分散していく。雄は尾の基部が長く、尾を外側に伸ばすと、肛門(総排出孔)が、背甲の縁よりも外に出る。この性鑑別法は、ほとんどのヌマガメにも使える。本種はまた、雄の腹甲の中央がひどく凹む傾向がある。

淡水性で、水田や池、川にすむ。魚・水生昆虫・ミミズ・水草などを食べる。



## ミシシッピーアカミミガメ

ヌマガメ科

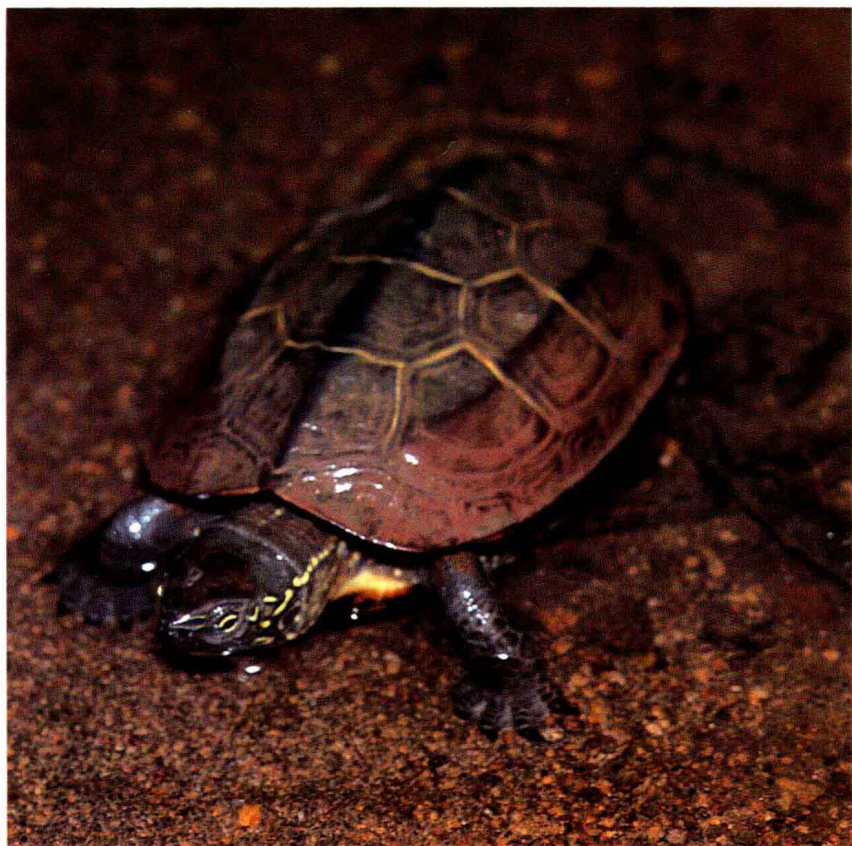
学名 *Chrysemys scripta elegans*

分布 オハイオ・アイオワからニューメキシコにかけての、アメリカ合衆国南部が原産。ペットとして輸入されたものが、逃げたり捨てられたりして、各地に野生化している。

眼の後ろに赤い帯がある。甲長一二〜二八cmで、雌のほうが大きくなる。

雑食性で、若い間は肉食傾向が強い。採食活動は早朝に盛ん。日中は陸上で日光浴（いわゆる甲ら干し）をしていることが多い。雄は一二cm、雌は一五cm以上で成熟する。雄は前肢の爪が長くなり、雌の前で指をふるわせ、くすぐるような求愛動作をする。

四〜七月に巣を掘って二〜二卵を産む。フ化直後の甲長は三cmほど。幼体は鮮やかな緑色で美しい。養殖されたものが大量に売買されている。日本では、同属のフロリダガメなどとともに、ミドリガメと総称されることが多



## クサガメ

ヌマガメ科

学名 *Chinemys reevesi*

分布 本州・四国・九州、隠岐・見島・宍岐・対馬など。国外では、朝鮮・中国東部・台湾などに生息。

背甲には三本の隆起したうねが走る。両側の二本は前後でやや内側に曲がる。背甲の周縁は滑らかで、後縁にわずかな凹凸があるのみ。甲長一〇～二五cmで、雌は雄より大きくなる。

雑食だが、主に魚・水生動物を食べる。六～七月に穴を掘って、一回に四～一卵を産む。一頭の雌は年に一～二回産卵する。子ガメがフ化して地上に出現するのは、翌年の四～五月にもち越されるが、当年の十月に出てくるものもいる。フ化直後は甲長約三〇mm。

成長を中国北部の例で示すと、一歳で五六mm、二歳七一mm、三歳八六mm、五歳九八mm、八歳一三〇mmで、その後も一生成長を続ける。日本のものは、これよりやや成長が早いと思われる。



### ※クサガメの黒化

日本産のクサガメの普通の個体は、各甲板が黒褐色で、細く黄色に縁取られている。頭部の側面から頸部にかけては黄色い不規則な縦条が何本かある。虹彩の色も黄色っぽく、ひとみを横切る黒い帯がある。しかし、何頭かを見れば、黒化した個体が混じっているのを発見できよう。全身に模様がなくなり、眼まで黒い。

どういうわけか、このタイプがイシガメと間違われていることも少なくない。これを別種と考え、*micolor* (単色を意味する) という学名を与えた学者もいたほどで、かなり異なった感じがするが、形態などは全くのクサガメで、無論、同一種である。老熟した個体、特に雄にとっては、この黒化はむしろ普通に出る現象である。色彩変異というよりは、成長に伴う変化とみなせよう。同様の現象はアカミミガメなどのアメリカヌマガメ属にも知られ、かつて分類に無用の混乱を起こさせていた。

▲写真(上||雄、下||雌)



セマルハコガメ ヌマガメ科

学名 *Cuora flavomarginata flavo-marginata*

分布 石垣島・西表島。台湾。

腹甲がちょうどつがいで接続した前後二つの部分に分かれる。外敵に襲われると、頭・尾・肢をひっこめ、折り曲げた腹甲でふたをしてしまうので、箱ガメの名がある。幼体の腹甲はあまり動かない。甲長は一一〜一七cmで、一四cm前後の個体が多い。

森林の周辺に多く、川・池沼の近くなどのやや湿った所にいる。陸生で、倒木や岩石・落葉の下に潜み、雨天時などに外へ出てくる。水にはあまり入らないが、泳ぐことはできる。ミミズ・昆虫などの動物質、果実などの植物質を食べる。六〜八月に、二〜五卵を産む。産卵のために特に穴を掘ることはないらしく、凹みに産み落とす。卵の平均の大きさは、長径四五mm短径二六mmである。

国指定の天然記念物で、採集は禁じられている。



## リュウキュウヤマガメ

ヌマガメ科

学名 *Geomyda spengleri japonica*

分布 沖縄島・渡嘉敷島・久米島。

背甲は角張った長卵形で、三本のうねがあり、後縁はひどくぎざぎざしている。全体にごつい感じがする。

山地の林内、溪流の近くなど、陰湿な場所にすむ。陸上で暮らし、あまり水中に入らないが、リクガメ科ではない。他の多くのヌマガメと同様、雑食性。本種は特にミミズ・カタツムリ・昆虫・草木の葉・果実を食べる。六、八月に長径四五mm内外の卵を四、六個産む。

ヤマガメ類は属の再検討がなされた。未だに混乱はあるが、*Geomyda* 属は本種だけを含むと思われる。基亜種が中国南部、マレーシアなどに分布し、残存的な古いタイプの動物である。現在では数が非常に減ってきている。一九七三年一月一八日に県指定の天然記念物となり、一九七五年六月二六日に国指定に昇格した。



## アカウミガメ

ウミガメ科

学名 *Caretta caretta gigas*

分布 太平洋とインド洋との熱帯～温帯海域。北海道の太平洋岸や、日本海側では東北地方沿岸へも北上する。

頭部が丸っこくて大きいウミガメ。背甲は赤褐色。甲長七〇～一〇〇cm。カメの背甲の中央にある鱗板を椎甲板、その左右にあるのを肋甲板という。本種は肋甲板が普通五対ある。

他種のウミガメよりも寒い地方で繁殖する。西部太平洋岸での主要な産卵場は日本であり、沖繩・鹿児島・熊本・徳島・愛知・神奈川・千葉などの県の砂浜に上陸し、産卵する。産卵場の沖合で交尾し、五～七月にかけて、砂に深さ数十cmの穴を掘り、一三〇～二五〇卵を産む。卵は直径約四cmのピンポン球状。産卵後には再び穴を埋めて立ち去る。海に戻った雌は沖合の岩礁で憩い、二～三週間の間隔をおいて、シーズン中に数回産卵する。

親が砂浜を移動した跡は、ブルドーザーのわだちのようである。



## アオウミガメ

ウミガメ科

学名 *Chelonia mydas*

分布 大西洋・太平洋・インド洋の熱帯・亜熱帯海域。本州の日本海側にも北上する。

肋甲板が四対。タイマイと間違えやすいが、上あごの先がかぎ状に曲がっていない。甲長は普通1m以下。背甲は青っぽい灰褐色ないし暗褐色。なお、アオウミガメの名は、甲らの色ではなく、脂肪の緑色に由来する。

日本では小笠原と屋久島に産卵上陸する。沖合で、追跡したり咬み合ったりの行動の後、六時間にも及ぶ交尾をする。雌は交尾したくないとき、腹面を雄に向け、四肢を広げて拒否の姿勢をとる。雄のほう数が少なく、一頭の雄は何回も交尾するらしい。夜間に上陸して六〇〜一〇〇卵を産む。一シーズンに一頭の雌は二〜七回産卵。フ化した幼体は各種の無脊椎動物を食べて育つ。成体は海藻を主食とする。肉は臭味がなく美味で、よく食用にされる。





## スッポン

スッポン科

学名 *Trionyx sinensis*

分布 本州・四国・九州、沓岐・石垣・西表・与那国島。モンゴル・朝鮮・台湾・中国・海南島・インドシナ北部。ハワイのカウアイ島などにも移入されて土着している。

甲らには他のカメのような鱗板がなく、柔らかな皮膚に覆われている。甲長二〇〜三五cm。みずかきが非常によく発達している。淡水性で、底が砂泥質の沼や河川にすむ。主に肉食で、魚・甲殻類・昆虫・軟体動物を食べる。一〇〜三月頃までは砂泥中に潜って冬眠する。五歳ぐらいで性成熟し、春先に水中で交尾する。五〜八月にかけて、陸地に穴を掘り、直径約二cmの球形の卵を産む。一回に一五〜五〇卵、年に三〜五回産卵する。卵は二〜三か月後にフ化する。フ化直後の幼体は甲長三cm程で、腹面は赤味を帯び、黒っぽい斑紋がある。

高級料理になるが、一八世紀までは下品とされ、あまり食べられなかった。